

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2012 年度第 4 回研究会報告書新

東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 24 年度第 4 回研究会

日時：2012 年 10 月 27 日（土）午後 1 時 00 分から 6 時 30 分

場所：東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 堀江未央（京都大学大学院）

「西南中国におけるラフ族女性の結婚と移動 —省外漢族男性との婚出が村に与えた影響—」

2. 渡辺佳成（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

「10 世紀以前ミャンマーにおける諸民族の動向 —「ピュー」・「驃」および「モン」を中心に—」

趣旨説明

タイ文化圏は北においては中華世界、チベット世界、及びモンゴル世界とつながっていますが、また南においてはベンガル湾の海洋世界と連続しています。この度の研究会では南北方向の移動を取り上げた。先ず、人類学の立場から、堀江未央氏に東南アジア大陸部から中国内地への南北移動の形態として、雲南のラフ族女性の婚姻の事例について発表して頂いた。次に、渡辺佳成氏に東南アジア大陸部の歴史において大きな役割を果たした古代ミャンマーの諸民族を取り上げ、歴史学の立場から、「ピュー」・「驃」および「モン」と称される民族集団の捉え方について発表して頂いた。（唐立）

1. 「西南中国におけるラフ族女性の結婚と移動 —省外漢族男性との婚出が村に与えた影響—」

1980 年代の改革開放以降、中国各地の農村では、計画生育政策と産児調節に伴う男子の過剰や、経済成長に伴う婚資の高騰などによって、嫁不足が深刻化している。そのため、経済的により貧しい中国西南部に嫁を探し求める漢族男性が急増し、雲南省各地で女性の流出現象が起こっている。そこで、雲南省瀾滄ラフ族自治県の村落 P 村で行っ

たフィールドワークをもとに、ラフ族村落に近年大きな変化をもたらしている女性の省外流出現象に関する報告を行った。

女性の流出現象を、ラフ語では「ヘパとポイした（漢族と逃げた）」（以下ヘパポイ）と呼ぶ。P村のヘパポイは、1988年に起こった瀾滄大地震を契機とし、90年代の出稼ぎの開始に伴って起こってきた。その方法は、初期にはブローカーを介することがほとんどだったが、徐々に嫁探しの漢族男性が村を訪れるようになり、先にヘパポイした女性の紹介による婚出も増加した。ピークは2000年代初頭だったが、2006年ごろに瀾滄県政府が嫁探し目的の漢族男性の来訪を制限したため、結果としてポイが非合法化し、誘拐や詐欺が増加しつつある。

それまで民族間結婚をほとんど行わなかったP村において、女性のヘパポイは男性に危機感を呼び起こし、ラフ同士の結婚手続きに変化が起こりつつある。P村では、従来婚礼の実施を以て結婚の成立としていたが、現在では花嫁のヘパポイを怖れるため、結婚証という確実な法的契約を行うまでは婚礼を挙げない。また、婚礼を儀礼的手続きと披露宴とに分割し、儀礼的手続きのみを先にいき、婚資のやりとりや披露宴は結婚証登記以降に行うという新たな動きが見られた。

ヘパポイはラフと漢族との結婚だが、ラフ同士の結婚に比べてその手続きが非常に簡潔であり、ラフ社会からの断絶という色合いが強かった。しかし、ポイ女性の里帰りや通信手段の向上によって少しずつ意味合いを変え、非人道的要素を含みながらも、漢族地域に憧れる女性たちが外界に出て行く手段のひとつとなっている。ところが、実際には嫁ぎ先には彼女たちの期待するような生活は待っていないことがほとんどである。近年雲南省辺境地域で行われている貧困対策は婚家-生家間の経済格差を縮小し、嫁ぎ先の魅力は減りつつある。そのため、女性たちは婚家と生家とのあいだで揺れ動き、里帰り中の不倫や重婚が頻発することになる。親たちはそのような娘の不安定性を前に、娘の戸籍を手元に残すことで対応しようとしている。

従来、女性の結婚移民や労働移動の多くの事例では、女性は移動によって経済力を獲得し、実家に対する発言力を高めることが指摘されてきた。しかし、中国の場合は女性の経済的地位はさほど上昇しないため、よい生活を期待していた女性の不安定性をより高め、親や村社会はそれへの対応を迫られていると言える。（堀江未央）

2. 「10世紀以前ミャンマーにおける諸民族の動向-「ピュー」・「驃」および「モン」を中心に」

10世紀以前のミャンマー地域の歴史については、数少ない外国史料といくつかの都市遺跡からの出土史料をもとに、七世紀頃までに、エーヤーワディー流域にピュー王国、そして海岸地域にアラカン、モンの両王国が成立したと考えられてきた。しかし、「パガンの基礎を築いたと言われるような下ビルマのモン文化など存在しなかった」「パガ

ンの文化は、むしろ、ピューに多くを負っていた」というマイケル・アウントウインの刺激的な問題提起は、1000年紀の下ビルマにどのような文化、王国があったのか、これまで考えられてきた「ピュー文化」「モン文化」とは実際のところどのようなものであったのか、など、考古学者、美術史学者などの活発な議論を呼び起こした。

本報告ではこれらの議論を踏まえた上で、漢文史料を中心とする外国史料、および、新出の考古資料などを検討し、ピュー王国／ピュー文化、モン王国／モン文化の実像に迫ることを目指した。

まず、蛮書、旧唐書、新唐書などの伝える「驃」国の記述が、エーヤーワディー流域の都市遺跡とどのように関連づけられ、その中でも特に巨大で文化遺物も豊富なフモーザー（シュリークシェートラ）遺跡を「都」とする「ピュー王国」史像が形成されてきたかを検証し、ピュー王国という「一つの国」がエーヤーワディー流域に展開したという歴史観の誤っていることを指摘し、複数の「ピュー」の国が同時に存在し興亡を繰り返したと考えるべきであると主張した。そのことと関連して、9世紀に南詔の侵入によってピュー王国が滅亡したという従来の定説についても、「ピュー」の国々が攻撃を受け、そのうちの幾つかの都市の住民が強制移住させられたに過ぎないことを明らかにした。また、各都市遺跡の遺物の分析から、ピュー文化圏と呼べる地域的な広がりを確認し、それが「ピュー王国」史観と結びついてきたことを明らかにするとともに、共通する文化要素の中にも地域的特徴が存在し、それが各「ピュー」の国々の分布と一致する可能性を指摘した。

一方、「モン王国」についても、下ビルマ各地の都市遺跡の分布と出土遺物の分析から、ピューと同様に、複数の「モン」の国が存在した可能性を指摘し、そのことを念頭に置いた上で漢文史料、イスラム史料の記述を再検討する必要があることを述べた。ただ、モン文化については、ピュー文化との対比でいえば、共通する文化要素がそれほど多くなく、「モン文化圏」と呼べるような地域的広がりが見られないことを指摘し、その背景として、発掘がそれほど進んでいないことも考慮に入れる必要があるが、各都市がある程度の共通性を持ちつつ、様々な地域との交渉の中でそれぞれの文化を育ててきたことが考えられると結論づけた。

また、今後の展望として、今回触れることのできなかつたアラカンを含めて、ピュー、モン相互の間にどのような交渉、交流があったのか、さらに、ドヴァーラヴァティー、雲南・四川、インド・スリランカなどとの関係を、美術史、考古学の資料から探っていくことによって、より具体的な歴史像が明らかになる可能性を指摘した。（渡邊佳成）

各発表に対して活発な質疑応答がありました。（唐立）